

BROWN の定理の証明の概略

広瀬稔 (MINORU HIROSE)

CONTENTS

Introduction	1
1. 混合テイトモチーフの理論から導かれる事実の紹介	2
1.1. \mathcal{H} について	2
1.2. \mathcal{H} の構造定理	2
1.3. 周期写像	3
1.4. モチビックな反復積分	3
1.5. motivic coaction formula for iterated integral	4
2. \mathcal{H} のフィルトレーション	5
3. Charlton の Block notation	7
4. Brown の定理の証明	8
5. Brown の定理の系	10
6. Algebraic basis について	10
7. Hoffman star basis について	10
8. より一般の反復積分と混合テイトモチーフの周期について	11
9. 演習問題の解答	11
References	15

INTRODUCTION

多重ゼータ値 (Multiple Zeta Values) は次の無限級数で定義される実数である .

$$\zeta(k_1, \dots, k_r) := \sum_{0 < n_1 < \dots < n_r} \frac{1}{n_1^{k_1} \dots n_r^{k_r}} \quad (k_1, \dots, k_{r-1} \in \mathbb{Z}_{>0}, k_r \in \mathbb{Z}_{>1}).$$

ここで $k_1 + \dots + k_r$ のことを重さ (weight) , r のことを深さ (depth) という .

本稿の目的は Hoffman([7, Conjecture C, p493]) により予想され , Brown([1]) により証明された次の定理について解説することである .

定理 1. 重さ k の全て多重ゼータ値は

$$\{\zeta(k_1, \dots, k_r) \mid k_1, \dots, k_r \in \{2, 3\}, k_1 + \dots + k_r = k\}$$

の \mathbb{Q} -線形和として表される。

この定理の証明の鍵は次の 3 つである

- (1) \mathbb{Z} 上の混合テイトモチーフの理論 (とモチビックな反復積分の理論) からの帰結 .
- (2) Zagier の恒等式

Date: January 16, 2019.

(3) 初等的な議論

本稿では、1,2 について証明抜きで紹介し、3 の部分について解説する。

注意 1. $k_1, \dots, k_r \in \{2, 3\}$ となる整数の組 (k_1, \dots, k_r) を Hoffman index と呼ぶ。また Hoffman index 中の 3 の個数 $\#\{i \mid k_i = 3\}$ を Hoffman index のレベルと呼ぶ。

注意 2. 重さ k の多重ゼータ値の張る \mathbb{Q} -ベクトル空間を $\mathcal{Z}_k \subset \mathbb{Q}$ とし、整数 $\{d_k\}$ を $\sum_{k=0}^{\infty} d_k t^k = \frac{1}{1-t^2-t^3}$ で定めると、 $\dim_{\mathbb{Q}} \mathcal{Z}_k = d_k$ となることが Zagier ([9, Section 9, p509]) により予想されている。このうち上限 $\dim_{\mathbb{Q}} \mathcal{Z}_k \leq d_k$ は Brown 以前から Goncharov や寺杉らにより証明されていた。さて d_k は重さ k の Hoffman index の個数に一致する。よって次元予想 $\dim_{\mathbb{Q}} \mathcal{Z}_k = d_k$ が正しければ、定理 1 は \mathbb{Q} -ベクトル空間 \mathcal{Z}_k の生成元というだけでなく、基底も与えていることになる。

1. 混合テイトモチーフの理論から導かれる事実の紹介

本稿では混合テイトモチーフの周期の理論から導かれる次の事実を仮定する。

- (1) 余積構造付き次数付可換環 $\mathcal{H} = \bigoplus_{k=0}^{\infty} \mathcal{H}_k$ の存在。
- (2) \mathcal{H} の具体的な構造定理。
- (3) 周期写像 $\text{per} : \mathcal{H} \rightarrow \mathbb{R}$ の存在。
- (4) モチビックな反復積分 (多重ゼータ値) とその性質。
- (5) モチビックな反復積分の余積の計算。(Goncharov-Brown の余積公式)

本節では、これらの詳しい内容について解説する。

1.1. \mathcal{H} について。

定理 2. \mathbb{Z} 上の混合モチーフの周期の理論から、次を満たす三つ組 $(\mathcal{H}, \zeta^m(2), \Delta)$ が得られる。

- (1) $\mathcal{H} = \bigoplus_{k=0}^{\infty} \mathcal{H}_k$ は次数付き可換環。
- (2) $\zeta^m(2)$ は \mathcal{H}_2 の元。
- (3) Δ は準同型 $\mathcal{H} \rightarrow \mathcal{A} \otimes_{\mathbb{Q}} \mathcal{H}$ 。ここで $\mathcal{A} := \mathcal{H}/(\zeta^m(2))$ と置いた。¹

注意 3. 当然ながら、定理 2 は、それ単独では意味のない命題であり、後続の命題 (定理 3, 4, 5 等と組み合わせて始めて意味を持つ。)

注意 4. より一般的な観点からは、 \mathcal{H} は次のように理解される。まず、代数体 $K \subset \mathbb{C}$ および K の有限素点の集合 S に対して、混合テイトモチーフの周期の理論から、 $\mathcal{O}_{K,S}$ 上の混合テイトモチーフの effective periods のなす環が構成できる。これを $\mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$ と書いたとしよう。 $\mathcal{O}_{K,S}$ の複素共役が自分自身に一致するとき、 $\mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$ にも複素共役写像 $J : \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}) \rightarrow \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$ が作用する。定理 2 における \mathcal{H} は $\mathcal{H}(\mathbb{Z})$ の J 不変部分である。

1.2. \mathcal{H} の構造定理。

定義 1. 可換環 \mathcal{U}' を次で定める。まず底空間は

$$\begin{aligned} \mathcal{U}' &= \mathbb{Q}\langle f_{2i+1} \mid i \geq 1 \rangle = \mathbb{Q}\langle f_3, f_5, f_7, \dots \rangle \\ &= \mathbb{Q} \oplus \mathbb{Q}f_3 \oplus \mathbb{Q}f_5 \oplus \mathbb{Q}f_3f_3 \oplus \mathbb{Q}f_7 \oplus \mathbb{Q}f_3f_5 \oplus \mathbb{Q}f_5f_3 \oplus \dots \end{aligned}$$

とする。積はシャッフル積²で定める

¹ Δ は Hopf 代数の余積と似た数多くの性質を満たす。例えば $\Delta(xy) = \Delta(x)\Delta(y)$ である。また Δ が誘導する写像 $\Delta : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{A} \otimes \mathcal{A}$ によって \mathcal{A} は Hopf 代数になる。また \mathcal{H} は \mathcal{A} の comodule となる。これらの事実は \mathcal{H} の具体的な構造定理からも従う。

²シャッフル積とは、 $x \sqcup 1 = 1 \sqcup x = x$ と $f_a x \sqcup f_b y = f_a(x \sqcup f_b y) + f_b(f_a x \sqcup y)$ (ただし $x, y \in \mathcal{U}'$, $a, b \in \{3, 5, 7, \dots\}$) で帰納的に定まる双線形な二項演算である。

定義 2. 可換環 \mathcal{U} を

$$\mathcal{U} = \mathcal{U}' \otimes_{\mathbb{Q}} \mathbb{Q}[f_2]$$

で定める .

以下 \mathcal{U} の元 $f_{i_1} \cdots f_{i_n} \otimes f_2^m$ を単に $f_{i_1} \cdots f_{i_n} f_2^m$ と書く .

定義 3. 準同型

$$\Delta : \mathcal{U} \rightarrow \mathcal{U}' \otimes \mathcal{U}$$

を

$$\Delta(f_{i_1} \cdots f_{i_n} f_2^m) = \sum_{k=0}^n f_{i_1} \cdots f_{i_k} \otimes f_{i_{k+1}} \cdots f_{i_n} f_2^m$$

で定める .

定義 4. $\deg(f_i) = i$ とすることにより \mathcal{U} を次数付き環とみなす . つまり

$$\mathcal{U}_k = \bigoplus_{\substack{d \geq 0 \\ m \geq 0 \\ i_1, \dots, i_d \in \{3, 5, 7, \dots\} \\ i_1 + \dots + i_d + 2m = k}} \mathbb{Q} f_{i_1} \cdots f_{i_d} f_2^m .$$

定理 3. 付加構造付き次数付き環 $(\mathcal{H}, \zeta^m(2), \Delta)$ と $(\mathcal{U}, f_2, \Delta)$ の間には (非標準的) な同型³ ϕ が存在する .

1.3. 周期写像.

定理 4. 標準的な環準同型写像

$$\text{per} : \mathcal{H} \rightarrow \mathbb{C}$$

が存在する (周期写像と呼ばれる . 単射と予想されている .)

注意 5. より一般に $\text{per} : \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}) \rightarrow \mathbb{C}$ が定義可能である . ここで $\mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$ は注意 4 と同様 .

1.4. モチビックな反復積分. 0 以上の整数 k と $a_0, \dots, a_{k+1} \in \{0, 1\}$ に対してモチビックな反復積分 (motivic integral)

$$(1.1) \quad I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) \in \mathcal{H}_k$$

が定義される . また $\mathbb{k} = (k_1, \dots, k_r) \in \mathbb{N}^r$ に対して

$$\zeta^m(\mathbb{k}) = (-1)^r I^m(0; 10^{k_1-1} \cdots 10^{k_r-1}; 1)$$

と置く . I^m が満たす代表的な性質を挙げる

- (1) $k \geq 1$ かつ $a_0 = a_{k+1}$ なら $I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) = 0$.
- (2) $I^m(a_0; a_1) = 1$.
- (3) $I^m(0; 0; 1) = 0$.

³同型の正確な意味は次の通り .

- $\phi : \mathcal{H} \rightarrow \mathcal{U}$ は次数付き環の環準同型
- $\phi(\zeta^m(2)) = f_2$
- 次の図式は可換

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{H} & \xrightarrow{\Delta} & \mathcal{A} \otimes \mathcal{H} \\ \downarrow \phi & & \downarrow \phi \otimes \phi \\ \mathcal{U} & \xrightarrow{\Delta} & \mathcal{U}' \otimes \mathcal{U} \end{array}$$

(4) $I^m(a_0; \alpha; b)$ は shuffle 関係式

$$I^m(a; \alpha; b) \cdot I^m(a; \beta; b) = I^m(a; \alpha \sqcup \beta; b)$$

を満たす .

$$(5) I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) = (-1)^k I^m(a_{k+1}; a_k, \dots, a_1; a_0)$$

$$(6) I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) = I^m(1 - a_0; 1 - a_1, \dots, 1 - a_k; 1 - a_{k+1})$$

$$(7) \text{per}(\zeta^m(k_1, \dots, k_r)) = \zeta^{\sqcup}(k_1, \dots, k_r).$$

定義 5 (モチビック多重ゼータ値). 性質 (7) より $\text{per}(\zeta^m(\mathbb{k})) = \zeta(\mathbb{k})$ である .

注意 6.モチビックな反復積分はより一般的な文脈で定義される . まず , 通常反復積分の定義を述べよう . $a_0, \dots, a_{k+1} \in \mathbb{C}$ として , $a_0 \neq a_1, a_k \neq a_{k+1}$ を仮定する . また , $\gamma : [0, 1] \rightarrow \mathbb{C}$ をパスであって , $(\gamma(0), \gamma(1)) = (a_0, a_{k+1})$ かつ任意の $0 < t < 1$ に対して $\gamma(t) \notin \{a_1, \dots, a_k\}$ が成立するとする . このとき反復積分 $I_\gamma(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) \in \mathbb{C}$ が

$$I_\gamma(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) = \int_{0 < t_1 < \dots < t_k < 1} \prod_{j=1}^k \frac{d\gamma(t_j)}{\gamma(t_j) - a_j}$$

によって定義される .

さて , $a_0, \dots, a_{k+1} \in K$ の場合は , S を十分大きく取ればモチビックな反復積分

$$I_\gamma^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) \in \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$$

も定義可能である . (どのような S を取ればいいかについてもある程度正確に記述することができる ([6, Theorem 1.3]))

また , 条件 $(\gamma(0), \gamma(1)) = (a_0, a_{k+1})$ が満たされない場合は , 接基点 (tangential base point) の理論が必要になる . 具体的には単に $a_0 \in \mathbb{C}$ と $a_{k+1} \in \mathbb{C}$ を考える代わりに接基点 $a_0, a_{k+1} \in \{(p, v) \mid p \in \mathbb{C}, v \in T_p \mathbb{C} = \mathbb{C}\}$ を考える必要がある .

(1.1) における $I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1})$ は γ を最もシンプルなパスとし , 接基点を $(0, 1)$ と $(1, -1)$ にすることにより得られる .

演習 1. 性質 (3) と (4) から

$$\sum_{i=0}^k I^m(0; a_1, \dots, a_i, 0, a_{i+1}, \dots, a_k; 1) = 0$$

が従う . これを用いて次を示せ

$$I^m(0; \overbrace{0, \dots, 0}^a, 1, \overbrace{0, \dots, 0}^b; 1) = (-1)^{a+1} \binom{a+b}{a} \zeta^m(a+b+1)$$

1.5. **motivic coaction formula for iterated integral.** $\pi : \mathcal{H} \rightarrow \mathcal{H}/\zeta^m(2) = \mathcal{A}$ を自然な射影とする . 次の公式については [6, Theorem 1.2] や [1, Theorem 2.4] を参照 .

定理 5 (Goncharov の余積公式). $\Delta(I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}))$ は

$$\sum_{s=1}^{k+1} \sum_{\substack{i_0 < i_1 < \dots < i_s \\ i_0=0, i_s=k+1}} \pi \left(\prod_{p=0}^{s-1} I^m(a_{i_p}; a_{i_{p+1}}, \dots, a_{i_{p+1}-1}; a_{i_{p+1}}) \right) \otimes I^m(a_{i_0}; a_{i_1}, \dots, a_{i_{s-1}}; a_{i_s})$$

と等しい。⁴

例 1.

$$\begin{aligned}\Delta(I(a; b, c; d)) &= I(a, b, c, d) \otimes I(a, d) \\ &\quad + I(a, b)I(b, c, d) \otimes I(a, b, d) \\ &\quad + I(a, b, c)I(c, d) \otimes I(a, c, d) \\ &\quad + I(a, b)I(b, c)I(c, d) \otimes I(a, b, c, d).\end{aligned}$$

2. \mathcal{H} のフィルトレーション

定義 6. \mathcal{U} 上のフィルトレーション $\{0\} = F_{-1}\mathcal{U} \subset F_0\mathcal{U} \subset F_1\mathcal{U} \subset \dots \subset \mathcal{U}$ を

$$F_d\mathcal{U} = \bigoplus_{e=0}^d \bigoplus_{\substack{i_1, \dots, i_e \\ \in \{3, 5, 7, \dots\}}} \bigoplus_{s=0}^{\infty} \mathbb{Q} f_{i_1} \cdots f_{i_e} f_2^s$$

で定める. また, $F_d\mathcal{H} = \phi^{-1}(F_d\mathcal{U})$ と置く.

演習 2. $F_d\mathcal{H}$ が ϕ の選び方に依存しないことを示せ.

また $\text{gr}_d\mathcal{U} = F_d\mathcal{U}/F_{d-1}\mathcal{U}$, $\text{gr}_d\mathcal{H} = F_d\mathcal{H}/F_{d-1}\mathcal{H}$ と置く.

命題 1. $x \in \mathcal{H}_k$ で $\Delta(x) - 1 \otimes x - x \otimes 1 = 0$ となるとき,

$$x \in \begin{cases} F_0\mathcal{H} & k : \text{even} \\ F_1\mathcal{H} & k : \text{odd} \end{cases}$$

定義 7. $\tilde{\Delta}(x) = \Delta(x) - 1 \otimes x$.

命題 2. $x \in \mathcal{H}$ が $\tilde{\Delta}(x) \in \mathcal{A} \otimes F_d\mathcal{H}$ を満たすとき $x \in F_{d+1}\mathcal{H}$.

演習 3. 命題 1, 2 を証明せよ.

命題 1, 2 と Goncharov の余積公式を組み合わせることで, 色々なことが証明可能である.

命題 3. $k \in \mathbb{N}$ に対して $\phi(\zeta^m(2k)) \in \mathbb{Q}^\times f_2^k$, $\phi(\zeta^m(2k+1)) \in \mathbb{Q}^\times f_{2k+1}$.

命題 4. 任意の $k_1, \dots, k_r \in \mathbb{N}$ に対して $\zeta^m(k_1, \dots, k_r) \in F_r\mathcal{H}$.

命題 5. $\phi(\zeta^m(\{2\}^n)) \in \mathbb{Q}^\times f_2^n$.

⁴この公式で, 積となる部分が \otimes の左側に来るとは, 次のようにして覚えることができる. Goncharov の余積公式はより一般の反復積分

$$I_\gamma^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) \quad (a_0, \dots, a_{k+1} \in \bar{\mathbb{Q}} \subset \mathbb{C}, \gamma \text{ は } a_0 \text{ から } a_{k+1} \text{ へのパス})$$

にも一般化され $\Delta I_\gamma(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1})$ は

$$\sum_{\substack{i_0 < i_1 < \dots < i_s \\ i_0=0, i_s=k+1}} \pi \left(\prod_{p=0}^{s-1} I^m(a_{i_p}; a_{i_p+1}, \dots, a_{i_{p+1}-1}; a_{i_{p+1}}) \right) \otimes I_\gamma^m(a_0; a_{i_1}, \dots, a_{i_{s-1}}; a_{k+1})$$

となる. ここで, \otimes の左側の積に現れる $I^m(a_{i_p}; a_{i_p+1}, \dots, a_{i_{p+1}-1}; a_{i_{p+1}})$ は, 始点が a_{i_p} で終点が $a_{i_{p+1}}$ となるため γ から標準的に定めることが出来ない. よって \otimes の左側の積は well-defined にならないように見えるが, 実は反復積分は modulo $2\pi\sqrt{-1}$ でみると, パスのとり方に依らないことが証明できる. よって適切な quotient をとることで式が well-defined になるのである.

命題 6. $k \geq 0$ と $a_0, \dots, a_{k+1} \in \{0, 1\}$ に対して $d \geq 0$ を

$$d = \#\{0 \leq i \leq k \mid a_i = a_{i+1}\}$$

で定める . このとき

$$I^m(a_0; a_1, \dots, a_k; a_{k+1}) \in F_d \mathcal{H}$$

が成立する .

雰囲気をつかむために , 命題 5 を証明する .

Proof. n に関する帰納法で証明する . $(-1)^n \zeta^m(\{2\}^n) = I^m(0; \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2n}; 1)$ と置く . 帰納法の仮定および reversal formula より任意の $0 < k < n$ および任意の $0 < m$ に対して

$$\pi(I^m(0; \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2k}; 1)) = 0$$

$$\pi(I^m(1; \overbrace{0, 1, \dots, 0, 1}^{2k}; 0)) = 0$$

$$I^m(0; \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0, 1}^{2m-1}; 0) = 0$$

$$I^m(1; \overbrace{0, 1, \dots, 0, 1, 0}^{2m-1}; 1) = 0$$

となる . $\Delta I^m(0; \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2n}; 1)$ を Goncharov の余積公式 (定理 5) を用いて計算しよう . ここで公式内の $\pi(I^m(a_{i_p}; a_{i_p+1}, \dots, a_{i_{p+1}-1}; a_{i_{p+1}}))$ に着目する . $(a_{i_p}, a_{i_p+1}, \dots, a_{i_{p+1}-1}, a_{i_{p+1}})$

は $(0, \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2n}, 1)$ の長さ $i_{p+1} - i_p + 1$ の部分列である . よって $\pi(I^m(a_{i_p}; a_{i_p+1}, \dots, a_{i_{p+1}-1}; a_{i_{p+1}}))$ は $i_{p+1} - i_p + 1 = 2$ となる場合 , または $i_{p+1} - i_p + 1 = 2n + 2$ となる場合以外は 0

となる . よって $x_n = I^m(0; \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2n}; 1)$ と置くと

$$\Delta(x_n) = x_n \otimes 1 + 1 \otimes x_n$$

となる . よって命題 1 より $\phi(x_n) \in \mathbb{Q}f_2^n$ である . 最後に $x_n \neq 0$ を証明しよう . これは $\text{per}((-1)^n x_n) = \zeta(\{2\}^n) > 0$ から従う . \square

注意 7. \mathcal{U} 上のフィルトレーション \tilde{F} を

$$\tilde{F}_d \mathcal{U} = \bigoplus_{s=0}^{\infty} \bigoplus_{\substack{e \leq d \text{ (} s=0 \text{ の場合)} \\ e \leq d-1 \text{ (} s>0 \text{ の場合)}}} \bigoplus_{i_1, \dots, i_e \in \{3, 5, 7, \dots\}} f_{i_1} \cdots f_{i_e} f_2^s$$

で定め , $\tilde{F}_d \mathcal{H} = \phi^{-1}(\tilde{F}_d \mathcal{U})$ とおく . このとき

$$\zeta(k_1, \dots, k_d) \in \tilde{F}_d \mathcal{H}$$

となる (これは命題 4 の精密化である)

演習 4. $D_{k,d} = \dim_{\mathbb{Q}} \text{gr}_d \mathcal{H}_k$ と置くととき ,

$$\sum_{k=0}^{\infty} \sum_{d=0}^{\infty} D_{k,d} x^k y^d = \frac{1}{1 - x^2 - x^3 y}$$

を証明せよ．この母関数表示から $D_{k,d}$ は重さ k , レベル d の Hoffman index の個数

$$\#\{\mathbb{k} = (k_1, \dots, k_r) \in \{2, 3\}^r \mid \text{wt}(\mathbb{k}) = k, \#\{i \mid k_i = 3\} = d\}$$

に等しいことが分かる．

3. CHARLTON の BLOCK NOTATION

本節では Charlton のブロック記法 (Block notation, [2]) を用いて Brown の証明を解説する．Charlton のブロック記法は Brown の証明よりも後に導入された概念であるが, Hoffman index のような対象を扱うのに便利である．ブロック記法を扱う際は反復積分記号

$$I^m(a_0; a_1, \dots, a_n; a_{n+1})$$

をセミコロンを使わず

$$I^m(a_0, a_1, \dots, a_n, a_{n+1})$$

と書いたほうが分かりやすいので, 以後はセミコロンを使わないこの表記法を採用する．

0 と 1 を交互に並べて得られる空でない有限 01 列をブロックと呼ぶ．次はブロックの例である．

010101 (長さ 6, 先頭文字 0, 末尾文字 1)

101 (長さ 3, 先頭文字 1, 末尾文字 1)

0 (長さ 1, 先頭文字 0, 末尾文字 0).

定義 8. $d \geq 0$ と $k_0, \dots, k_d \in \mathbb{Z}_{\geq 1}$ に対して 0 から始まる 01 列 $B(k_0, \dots, k_d)$ を

$$B(k_0, \dots, k_d) = W_0 \cdots W_d$$

で定める．ただし, W_0, \dots, W_d は次で特徴づけられる唯一の 01 列である．

- W_0, \dots, W_d は長さ k_0, \dots, k_d のブロック
 - W_0 の先頭文字は 0 . また $i = 1, \dots, d$ に対して W_i の先頭文字は W_{i-1} の末尾文字に等しい .

例えば

$$B(3, 4, 5) = \overbrace{010}^3 \overbrace{0101}^4 \overbrace{10101}^5$$

である．0 から始まる任意の 01 列は, $B(k_0, \dots, k_d)$ の形で一意的に表すことが可能である．

定義 9. 反復積分記号 $I^m()$ に $B(k_0, \dots, k_d)$ を入れたものを $I_{\text{bl}}^m(k_0, \dots, k_d)$ で表す．例えば

$$I_{\text{bl}}^m(3, 4, 5) = I(0, 1, 0, 0, 1, 0, 1, 1, 0, 1, 0, 1).$$

(反復積分の端点も 01 列の一部と見なすことに注意．よって $I_{\text{bl}}^m(k_0, \dots, k_d)$ の重さは $k_0 + \dots + k_d - 2$ である) .

また $I_{\text{bl}}(k_0, \dots, k_d) := \text{per}(I_{\text{bl}}^m(k_0, \dots, k_d))$ と置く .

演習 5. 次を確認せよ .

$$\zeta^m(\{2\}^{k_0}, 3, \{2\}^{k_2}, 3, \dots, \{2\}^{k_{d-1}}, 3, \{2\}^{k_d}) = \pm I_{\text{bl}}^m(2k_0 + 3, \dots, 2k_{d-1} + 3, 2k_d + 2).$$

4. BROWN の定理の証明

重さ N , レベル $d \geq 0$ の Hoffman index と対応する , ブロック記法の index の集合を

$$\text{BH}_{N,d} = \{(k_0, \dots, k_d) \mid k_0, \dots, k_{d-1} \in 1 + 2\mathbb{Z}_{>0}, k_d \in 2\mathbb{Z}_{>0}, k_0 + \dots + k_d = N - 2\}$$

と置く .

本節では次の定理を証明する .

定理 6. $d \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対して

$$\{\zeta^m(k_1, \dots, k_r) \mid k_i \in \{2, 3\}, \#\{j \mid k_j = 3\} \leq d\}$$

は $F_d \mathcal{H}$ の \mathbb{Q} -ベクトル空間としての基底となる .

これは次と同値である .

定理 7. $N, d \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対して

$$\{I_{\text{bl}}^m(\mathbb{k}) \in \text{gr}_d \mathcal{H}_N \mid \mathbb{k} \in \text{BH}_{N,d}\}$$

は $\text{gr}_d \mathcal{H}_N$ の元として \mathbb{Q} 上一次独立である .

定義 10. $N \geq 0$ と $d \geq 1$ に対して , 同型写像

$$\partial_{N,d} : \text{gr}_d \mathcal{H}_N \rightarrow \bigoplus_{\substack{1 < r \leq N \\ r: \text{奇数}}} \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}_{N-r}$$

を次で定める . まず $\tilde{\Delta}(F_d \mathcal{H}) \subset \mathcal{H} \otimes F_{d-1} \mathcal{H}$ より $\tilde{\Delta}$ は写像 $\tilde{\Delta} : \text{gr}_d \mathcal{H} \rightarrow \mathcal{H} \otimes \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}$ を誘導する . このとき $\tilde{\Delta}(\text{gr}_d \mathcal{H}) = F_1 \mathcal{H} \otimes \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}$ が分かる . 特に weight N の部分を見ると

$$\tilde{\Delta}(\text{gr}_d \mathcal{H}_N) = \bigoplus_{\substack{1 < r \leq N \\ r: \text{奇数}}} F_1 \mathcal{H}_r \otimes \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}_{N-r}$$

である . $\partial_{N,d}$ は合成写像

$$\text{gr}_d \mathcal{H}_N \xrightarrow{\tilde{\Delta}} \bigoplus_{\substack{1 < r \leq N \\ r: \text{奇数}}} F_1 \mathcal{H}_r \otimes \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}_{N-r} \xrightarrow{(r-1)2^{2-r} \zeta^m(r) \otimes x \mapsto x} \bigoplus_{\substack{1 < r \leq N \\ r: \text{奇数}}} \text{gr}_{d-1} \mathcal{H}_{N-r}$$

で定義される .

定理 7 は , d に関する帰納法で証明する . $d = 0$ の場合は簡単なので $d \geq 1$ としよう . 定理を示すには

$$\{\partial_{N,d}(I_{\text{bl}}^m(\mathbb{k})) \mid \mathbb{k} \in \text{BH}_{N,d}\}$$

が一次独立であることを示せばよい . 命題 5 に注意しながら Goncharov の余積公式 (定理 5) を用いると

$$\tilde{\Delta}(I_{\text{bl}}^m(k_0, \dots, k_d)) = \sum_{s=0}^{d-1} \sum_{\substack{1 < r \leq k_s + k_{s+1} - 2 \\ r: \text{奇数}}} \xi_{k_s, k_{s+1}}^r \otimes I_{\text{bl}}^m(k_0, \dots, k_{s-1}, k_s + k_{s+1} - r, k_{s+2}, \dots, k_d)$$

ただし

$$\xi_{x,y}^r := \sum_{\substack{0 < x' \leq a \\ 0 < y' \leq b \\ x' + y' = r + 2}} \pi(I_{\text{bl}}^m(x', y'))$$

となる．ここで， $\pi(I_{\text{bl}}^m(a, b))$ の値を教えてくれるのが Zagier による次の公式である.⁵

定理 8 ([10, Theorem 1]). 1 以上の奇数 x と 2 以上の偶数 y に対して

$$I_{\text{bl}}^m(x, y) = 2 \sum_{\substack{1 < m < x+y \\ m \equiv 1 \pmod{2}}} \left(\binom{m-1}{x-1} - \left(1 - \frac{2}{2^m}\right) \binom{m-1}{y-1} \right) I_{\text{bl}}^m(x+y-m) \zeta^m(m).$$

特に $\pi(I_{\text{bl}}^m(x, y)) \in \mathcal{A}$ は次に等しい:

$$2 \left(\binom{x+y-3}{x-1} - \left(1 - \frac{2}{2^{x+y-2}}\right) \binom{x+y-3}{y-1} \right) \zeta^m(x+y-2).$$

演習 6. 定理 8 の $x = 1$ の場合は， $x \geq 3$ の場合に帰着されることを示せ．

注意 8. 実際に Zagier が証明したのは (モチビック版ではなく) 実数に対する等式

$$I_{\text{bl}}(x, y) = 2 \sum_{\substack{1 < m < x+y \\ m \equiv 1 \pmod{2}}} \left(\binom{m-1}{x-1} - \left(1 - \frac{2}{2^m}\right) \binom{m-1}{y-1} \right) I_{\text{bl}}(x+y-m) \zeta(m)$$

である．この等式からモチビック版が導かれることは [1, Theorem 4.3] の証明を参照せよ．

Zagier の恒等式から次が従う．

$$(4.1) \quad \xi_{x,y}^r = 2\zeta^m(r) \times \left(\begin{cases} \binom{r-1}{x-1} & x : \text{odd} \\ \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{x-1} & x : \text{even} \end{cases} - \begin{cases} \binom{r-1}{y-1} & y : \text{odd} \\ \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{y-1} & y : \text{even} \end{cases} \right)$$

演習 7. Zagier の恒等式を用いて，(4.1) を証明せよ．

この式を具体的に行列表示したものを

$$\partial_{N,d}(I_{\text{bl}}^m(\mathbb{k})) = \sum_{\mathbb{k}'} M_{\mathbb{k},\mathbb{k}'} I_{\text{bl}}^m(\mathbb{k}')$$

とする．ただし， \mathbb{k} は $\text{BH}_{N,d}$ の元を動き， \mathbb{k}' は $\bigcup_{\substack{1 < r < N \\ r: \text{奇数}}} \text{BH}_{N-r,d-1}$ の元を動く．

あとは $M := (M_{\mathbb{k},\mathbb{k}'})_{\mathbb{k},\mathbb{k}'}$ が可逆行列であることを示せば定理 7 の証明が完了する．これは次の事実から従う．

- (1) M は全ての成分が $\mathbb{Z}_{(2)} := \{a/b \mid b : \text{odd}\}$ に属する．
- (2) M は (行と列を適切に並べたら)

$$A \equiv \begin{pmatrix} 1 & & * \\ & \ddots & \\ 0 & & 1 \end{pmatrix} \pmod{2\mathbb{Z}_{(2)}}.$$

特に $\det M \equiv 1 \pmod{2\mathbb{Z}_{(2)}}$.

演習 8. (1),(2) が成立していることを確認せよ．

⁵Zagier の原論文で述べられている形とは少し違うが，同値性は (主張の証明よりも) 簡単に示せる．

5. BROWN の定理の系

定理 6 および命題 4, 6 の系として次が得られる .

定理 9. $k, d \geq 0$ とする . 以下はいずれも重さ k , レベル d 以下の *Hoffman basis*

$$\{\zeta(k_1, \dots, k_r) \mid k_1, \dots, k_r \in \{2, 3\}, k_1 + \dots + k_r = k, \#\{j \mid n_j = 3\} \leq d\}$$

の \mathbb{Q} -線形和となる .

- (1) $\zeta(k_1, \dots, k_e) \times \pi^{2s}$. ただし , $k_1 + \dots + k_e + 2s = k, e \leq d$.
- (2) $I_{\text{bl}}(k_0, \dots, k_e)$. ただし , $k_0 + \dots + k_e = k - 2, e \leq d$.
- (3) $\prod_{j=1}^m I_{\text{bl}}(k_0^{(j)}, \dots, k_{e_j}^{(j)})$. ただし $\sum_{j=1}^m \sum_{i=1}^{e_j} k_i^{(j)} = k - 2m, \sum_{j=1}^m e_j \leq d$.

注意 9. (3) は (2) の一般化である .

6. ALGEBRAIC BASIS について

\mathcal{H} の (linear ではなくて) algebraic な basis についても , Brown により結果が知られている . 詳細については原論文を参照してほしい .

定理 10 ([1, Theorem 8.1]). 集合

$$\{\zeta^{\text{m}}(w) \mid w \text{ は } 2, 3 \text{ の Lyndon word}\}$$

は \mathcal{H} の *polynomial basis* となる .

7. HOFFMAN STAR BASIS について

等号付き多重ゼータ値を

$$\zeta^*(k_1, \dots, k_r) := \sum_{0 < n_1 \leq \dots \leq n_r} \frac{1}{n_1^{k_1} \dots n_r^{k_r}}$$

で定義する . これが多重ゼータ値の線形和でかけることは , 定義からすぐに分かる . Ihara-Kajikawa-Ohno-Okuda は次を予想した .

予想 1 ([8, Conjecture 1]). 全ての多重ゼータ値は

$$\{\zeta^*(k_1, \dots, k_r) \mid k_1, \dots, k_r \in \{2, 3\}\}$$

の \mathbb{Q} 線形結合で書ける .

この主張については (陽に述べている箇所は見つけれなかったが) 以下で説明するように既に証明されているように思われる . Glanois は次を示した .

定理 11. [4, Theorem 4.2] 次は \mathcal{H} の基底となる .

$$\{\zeta^{\sharp, \text{m}}(2a_0 + 1, 2a_1 + 3, \dots, 2a_{p-1} + 3, \overline{2a_p + 2}), a_i \geq 0\}.$$

周期写像 per を考えることにより , 系として次が得られる

系 1. 全ての多重ゼータ値は ,

$$\{\zeta^{\sharp}(2a_0 + 1, 2a_1 + 3, \dots, 2a_{p-1} + 3, \overline{2a_p + 2}), a_i \geq 0\}$$

の \mathbb{Q} -線形和となる .

一方 , Zhao により次が知られている .

定理 12. [11]

$$\zeta^{\sharp}(2a_0 + 1, 2a_1 + 3, \dots, 2a_{p-1} + 3, \overline{2a_p + 2}) = \zeta^*(\{2\}^{a_0}, 3, \{2\}^{a_1}, \dots, 3, \{2\}^{a_p}).$$

系 1 と定理 12 から予想 1 が示される .

8. より一般の反復積分と混合テイトモチーフの周期について

$K \subset \mathbb{C}$ を代数体とし, S を K の有限素点の集合とする. このとき, 1 節で述べたのと同様の定理が成り立つ.

- (1) 代数体 $K \subset \mathbb{C}$ に対し, 次数付き環 $\mathcal{H}(K) = \bigoplus_{i=0}^{\infty} \mathcal{H}_i(K)$ が存在する (K 上の混合テイトモチーフの周期の環)
- (2) 次数付き環 $\mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}) = \bigoplus_{i=0}^{\infty} \mathcal{H}_i(\mathcal{O}_{K,S})$ が存在する ($\mathcal{O}_{K,S}$ 上の混合テイトモチーフの周期の環)
- (3) 環準同型 $\text{per} : \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}) \rightarrow \mathbb{C}$ が存在する.
- (4) 特別な元 $\mu \in \mathcal{H}_1(\mathcal{O}_{K,S})$ であって $\text{per}(\mu) = 2\pi\sqrt{-1}$ となるものが存在する. $\mathcal{A}(\mathcal{O}_{K,S}) = \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})/(\mu)$ と置く.
- (5) 余積 $\Delta : \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}) \rightarrow \mathcal{A}(\mathcal{O}_{K,S}) \otimes \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S})$ が存在する.
- (6) 非標準的な同型

$$\mathcal{A}_n(\mathcal{O}_{K,S}) \simeq \bigoplus_{\substack{0 \leq d \\ n_1 + \dots + n_d = n}} \bigotimes_{j=1}^d (K_{2n_j-1}(\mathcal{O}_{K,S}) \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{Q})$$

が存在する.

- (7) $n \geq 0, a_0, \dots, a_{n+1} \in K$ に対して

$$I_{\gamma}^m(a_0, \dots, a_{n+1}) \in \mathcal{H}(K)$$

が定まり, $\text{per}(I_{\gamma}^m(a_0, \dots, a_{n+1})) = I_{\gamma}(a_0, \dots, a_{n+1}) \cdot \{a_0, \dots, a_{n+1}, \infty\} \subset X$ となるとき, これは $\mathbb{P}^1 \setminus X$ 上の反復積分と呼ばれる.

- (8) 更に $a_i - a_j \in \mathcal{O}_{K,S}^{\times}$ が任意の $i \neq j$ に対して成立するとき

$$I(a_0, \dots, a_{n+1}) \in \mathcal{H}(\mathcal{O}_{K,S}).$$

- (9) Goncharov-Brown の余積公式も成立する.

(7) は反復積分が混合テイトモチーフの周期となることを主張しているが, 逆は非常に難しい問題である.

予想 2 (Goncharov, [5, Conjecture 0.17(a)]). $K \subset \mathbb{C}$ を代数体とする. $\mathcal{H}(K)$ の任意の元は, $\mathbb{P}^1 \setminus (K \cup \{\infty\})$ 上の反復積分の \mathbb{Q} -線形和だろう.

この予想は, $K = \mathbb{Q}$ の場合ですら未解決である. Brown の定理からは次が従う.

定理 13. $\mathcal{H}(\mathbb{Z})$ の任意の元は $\mathbb{P}^1 \setminus (\{0, 1, \infty\})$ 上の反復積分の \mathbb{Q} -線形和である.

Brown の定理と同じタイプの定理としては次が知られている.

定理 14 (Deligne, [3]). $N \in \{2, 3, 4, 6, 8\}$ とする. μ_N を 1 の N 乗根の集合とする. $\mathcal{H}(\mathbb{Z}[\zeta_N, \frac{1}{N}])$ の任意の元は $\mathbb{P}^1 \setminus (\{0, \infty, \mu_N\})$ 上の反復積分の \mathbb{Q} -線形和である.

9. 演習問題の解答

命題.

$$I^m(0; \overbrace{0, \dots, 0}^a, 1, \overbrace{0, \dots, 0}^b; 1) = (-1)^{a+1} \binom{a+b}{a} \zeta^m(a+b+1)$$

Proof. a に関する帰納法で証明する. $a = 0$ の場合は明らかである. $\overbrace{0, \dots, 0}^{a-1}, 1, \overbrace{0, \dots, 0}^b$ との shuffle product より

$$\begin{aligned} aI^m(0; \overbrace{0, \dots, 0}^a, 1, \overbrace{0, \dots, 0}^b; 1) &= -(b+1)I^m(0; \overbrace{0, \dots, 0}^{a-1}, 1, \overbrace{0, \dots, 0}^{b+1}; 1) \\ &= (b+1)(-1)^{a+1} \binom{a+b}{a-1} \zeta^m(a+b+1) \quad (\text{帰納法の仮定を用いた}) \\ &= a(-1)^{a+1} \binom{a+b}{a} \zeta^m(a+b+1). \end{aligned}$$

よって示された. □

演習. $F_d \mathcal{H}$ が ϕ の選び方に依存しないことを示せ.

Proof. $F_0 \mathcal{H} = \ker(\mathcal{H} \rightarrow \mathcal{A})$ と $F_d \mathcal{H} = \tilde{\Delta}^{-1}(\mathcal{A} \otimes F_{d-1} \mathcal{H})$ から従う. □

演習. $\Delta(x) - 1 \otimes x - x \otimes 1 = 0$ となる任意の $x \in \mathcal{H}_k$ に対して,

$$x \in \begin{cases} F_0 \mathcal{H} & k : \text{even} \\ F_1 \mathcal{H} & k : \text{odd}. \end{cases}$$

また $x \in \mathcal{H}$ が $\tilde{\Delta}x := \Delta(x) - 1 \otimes x \in \mathcal{A} \otimes F_d \mathcal{H}$ を満たすとき $x \in F_{d+1} \mathcal{H}$.

Proof. \mathcal{U} について同様の主張を示せばよい. $\{f_{i_1} \cdots f_{i_m} f_2^s\}$ から生成される \mathcal{U} の部分空間を $\mathcal{U}^{(m)}$ と置く. $\mathcal{U} = \bigoplus_{m=0}^{\infty} \mathcal{U}^{(m)}$ である. 線形写像 $\lambda: \mathcal{U}' \otimes \mathcal{U} \rightarrow \mathcal{U}$ を

$$\lambda(f_{i_1} \cdots f_{i_m} \otimes f_{j_1} \cdots f_{j_n} f_2^s) = \begin{cases} f_{i_1} f_{j_1} \cdots f_{j_n} f_2^s & m = 1 \\ 0 & m \neq 1 \end{cases}$$

で定める. このとき $m \geq 1$ と $t \in \mathcal{U}^{(m)}$ に対して定義から $\lambda(\Delta(t)) = t$ であり, $t \in \mathcal{U}^{(0)}$ に対して $\lambda(\Delta(t)) = 0$ である.

さて, $\Delta(x) - 1 \otimes x - x \otimes 1 = 0$ と仮定しよう. $x = x_0 + x_1 + x_{\geq 2}$, ただし $x_0 \in \mathcal{U}^{(0)}$, $x_1 \in \mathcal{U}^{(1)}$, $x_{\geq 2} \in \bigoplus_{m=2}^{\infty} \mathcal{U}^{(m)}$ と分解すると,

$$\begin{aligned} x_1 + x_{\geq 2} &= \lambda(\Delta(x)) \\ &= \lambda(1 \otimes x + x \otimes 1) \\ &= \lambda(x \otimes 1) \\ &= x_1 \end{aligned}$$

となる. よって $x_{\geq 2} = 0$ となり, 前半の主張が示された.

次に $\Delta(x) - 1 \otimes x \in \mathcal{A} \otimes F_d \mathcal{H}$ と仮定する. $x \in \bigoplus_{m=1}^{\infty} \mathcal{U}^{(m)}$ と仮定しても一般性を失わない. このとき

$$\begin{aligned} x &= \lambda(\Delta(x)) \\ &= \lambda(\Delta(x) - 1 \otimes x) \end{aligned}$$

であるが, $\Delta(x) - 1 \otimes x \in \mathcal{A} \otimes F_d \mathcal{H}$ より

$$\lambda(\Delta(x) - 1 \otimes x) \in F_{d+1} \mathcal{H}$$

である. よって $x \in F_{d+1} \mathcal{H}$ が示された. □

演習. $D_{k,d} = \dim_{\mathbb{Q}} \text{gr}_d \mathcal{H}_k$ と置くととき ,

$$\sum_{k=0}^{\infty} \sum_{l=0}^{\infty} D_{k,d} x^k y^d = \frac{1}{1 - x^2 - x^3 y}$$

を証明せよ .

Proof. $D_{k,d} = \dim_{\mathbb{Q}} \text{gr}_d \mathcal{H}_k = \dim_{\mathbb{Q}} \text{gr}_d \mathcal{U}_k$ である . よって定義より

$$\begin{aligned} \sum_{k=0}^{\infty} \sum_{l=0}^{\infty} D_{k,d} x^k y^d &= \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{s=0}^{\infty} (x^3 y + x^5 y + x^7 y + \cdots)^n x^{2s} \\ &= \frac{1}{1 - \frac{x^3 y}{1-x^2}} \times \frac{1}{1-x^2} \\ &= \frac{1}{1-x^2-x^3 y}. \end{aligned}$$

□

演習.

$$\zeta^{\mathfrak{m}}(\{2\}^{k_0}, 3, \{2\}^{k_1}, 3, \dots, \{2\}^{k_{d-1}}, 3, \{2\}^{k_d}) = \pm I_{\text{bl}}^{\mathfrak{m}}(2k_0 + 3, \dots, 2k_{d-1} + 3, 2k_d + 2).$$

Proof. 定義より

$$\begin{aligned} &(-1)^{k_0 + \cdots + k_d} \zeta^{\mathfrak{m}}(\{2\}^{k_0}, 3, \{2\}^{k_1}, 3, \dots, \{2\}^{k_{d-1}}, 3, \{2\}^{k_d}) \\ &= I^{\mathfrak{m}}(0, \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_0}, 1, 0, 0, \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_1}, 1, 0, 0, \dots, 1, 0, 0, \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_{d-1}}, 1, 0, 0, \overbrace{1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_d}, 1) \\ &= I^{\mathfrak{m}}(\overbrace{0, 1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_0+3}, \overbrace{0, 1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_1+3}, \dots, \overbrace{0, 1, 0, \dots, 1, 0}^{2k_{d-1}+3}, \overbrace{0, 1, \dots, 0, 1}^{2k_d+2}) \\ &= I_{\text{bl}}^{\mathfrak{m}}(2k_0 + 3, \dots, 2k_{d-1} + 3, 2k_d + 2). \end{aligned}$$

□

演習. 定理 8 の $x = 1$ の場合は , $x \geq 3$ の場合に帰着されることを示せ .

Proof. n を 3 以上の奇数とする .

□

$\overbrace{(1, 0, \dots, 1, 0)}^{n-3}$ と (0) の shuffle 積より

$$0 = I_{\text{bl}}^{\mathfrak{m}}(1, n-1) + 2 \sum_{\substack{x+y=n \\ x:3 \text{ 以上の奇数} \\ y:2 \text{ 以上の偶数}}} I_{\text{bl}}^{\mathfrak{m}}(x, y).$$

よって定理 8 の $x \geq 3$ での成立を仮定すると

$$\begin{aligned}
I_{\text{bl}}^m(1, n-1) &= -4 \sum_{\substack{x+y=n \\ x:3 \text{ 以上の奇数} \\ y:2 \text{ 以上の偶数}}} \sum_{\substack{1 < m < n \\ m: \text{奇数}}} \left(\binom{m-1}{x-1} - \left(1 - \frac{2}{2^m}\right) \binom{m-1}{y-1} \right) I_{\text{bl}}^m(x+y-m) \zeta^m(m) \\
&= -4 \sum_{\substack{1 < m < n \\ m: \text{奇数}}} \left((2^{m-2} - 1) - \left(1 - \frac{2}{2^m}\right) 2^{m-2} \right) I_{\text{bl}}^m(x+y-m) \zeta^m(m) \\
&= 2 \sum_{\substack{1 < m < n \\ m: \text{奇数}}} I_{\text{bl}}^m(x+y-m) \zeta^m(m). \\
&= 2 \sum_{\substack{1 < m < n \\ m: \text{奇数}}} \left(\binom{m-1}{1-1} - \left(1 - \frac{2}{2^m}\right) \binom{m-1}{(n-1)-1} \right) I_{\text{bl}}^m(n-m) \zeta^m(m).
\end{aligned}$$

よって示された .

演習. Zagier の恒等式を用いて, (4.1) を証明せよ .

Proof. $A_{x,y}$ と $B_{x,y}$ を

$$\begin{aligned}
A_{x,y} &= \begin{cases} 2 \binom{x+y-3}{x-1} \zeta^m(x+y-2) & x : \text{odd}, y : \text{even} \\ -2 \binom{x+y-3}{y-1} \zeta^m(x+y-2) & x : \text{even}, y : \text{odd} \end{cases} \\
B_{x,y} &= \begin{cases} -2 \left(1 - \frac{2}{2^{x+y-2}}\right) \binom{x+y-3}{y-1} \zeta^m(x+y-2) & x : \text{odd}, y : \text{even} \\ 2 \left(1 - \frac{2}{2^{x+y-2}}\right) \binom{x+y-3}{x-1} \zeta^m(x+y-2) & x : \text{even}, y : \text{odd} \end{cases}
\end{aligned}$$

で定める . 定義より

$$\begin{aligned}
A_{2n+1, 2m+2} + A_{2n+2, 2m+1} &= 0 \\
B_{2n+2, 2m+3} + B_{2n+3, 2m+2} &= 0
\end{aligned}$$

であり,

$$\begin{aligned}
\xi_{x,y}^r &= \sum_{\substack{0 < x' \leq x \\ 0 < y' \leq y \\ x' + y' = r+2}} \pi(I_{\text{bl}}^{\text{m}}(x', y')). \\
&= \sum_{\substack{0 < x' \leq x \\ 0 < y' \leq y \\ x' + y' = r+2}} A_{x', y'} + B_{x', y'} \\
&= \sum_{\max(1, r+2-y) \leq x' \leq \min(x, r+2-1)} A_{x', r+2-x'} + B_{x', r+2-x'} \\
&= \begin{cases} A_{r+2-y, y} & y : \text{odd} \\ 0 & y : \text{even} \end{cases} + \begin{cases} A_{x, r+2-x} & x : \text{odd} \\ 0 & x : \text{even} \end{cases} \\
&+ \begin{cases} B_{r+2-y, y} & y : \text{even} \\ 0 & y : \text{odd} \end{cases} + \begin{cases} B_{x, r-x} & x : \text{even} \\ 0 & x : \text{odd} \end{cases} \\
&= \begin{cases} A_{x, r+2-x} & x : \text{odd} \\ B_{x, r+2-x} & x : \text{even} \end{cases} + \begin{cases} A_{r+2-y, y} & y : \text{odd} \\ B_{r+2-y, y} & y : \text{even} \end{cases} \\
&= \begin{cases} 2 \binom{r-1}{x-1} \zeta^{\text{m}}(r) & x : \text{odd} \\ 2 \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{x-1} \zeta^{\text{m}}(r) & x : \text{even} \end{cases} + \begin{cases} -2 \binom{r-1}{y-1} \zeta^{\text{m}}(r) & y : \text{odd} \\ -2 \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{y-1} \zeta^{\text{m}}(r) & y : \text{even} \end{cases} \\
&= 2 \zeta^{\text{m}}(r) \times \left(\begin{cases} \binom{r-1}{x-1} & x : \text{odd} \\ \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{x-1} & x : \text{even} \end{cases} - \begin{cases} \binom{r-1}{y-1} & y : \text{odd} \\ \left(1 - \frac{2}{2^r}\right) \binom{r-1}{y-1} & y : \text{even} \end{cases} \right)
\end{aligned}$$

である．よって示された． \square

REFERENCES

- [1] F. C. S. Brown, ‘Mixed Tate motives over \mathbb{Z} ,’ *Annals of Math.* 175 (2012), 949-976.
- [2] S. Charlton, ‘The alternating block decomposition of iterated integrals, and cyclic insertion on multiple zeta values,’ preprint 1703.03784[NT].
- [3] P. Deligne, ‘Le groupe fondamental unipotent motivique de $\mathbb{G}_m - \mu_N$, pour $N = 2, 3, 4, 6$ ou 8 ,’ *Publ. Math. Inst. Hautes Études Sci.* (2010), 101-141.
- [4] C. Glanois, ‘Unramified Euler sums and Hoffman basis,’ preprint 1603.05178[NT].
- [5] A. B. Goncharov, ‘Polylogarithms in arithmetic and geometry,’ In *Proceedings of the International Congress of Mathematicians, Vol. 1, 2 (Zürich, 1994)*, pages 374-387, Basel, 1995. Birkhäuser.
- [6] A. B. Goncharov, ‘Galois symmetries of fundamental groupoids and noncommutative geometry,’ *Duke Math. J.* 128 (2005), 209-284.
- [7] M. E. Hoffman, ‘The algebra of multiple harmonic series,’ *J. Algebra* 194 (1997), 477-495.
- [8] K. Ihara, J. Kajikawa, Y. Ohno, and J. Okuda, ‘Multiple zeta values vs. multiple zeta-star values,’ *J. Algebra* 332 (2011), 187-208.
- [9] D. Zagier, ‘Values of zeta functions and their applications,’ in *First European Congress of Mathematics (Paris, 1992)*, Vol. II, A. Joseph et. al. (eds.), Birkhäuser, Basel, 1994, pp. 497-512.
- [10] D. Zagier, ‘Evaluation of the multiple zeta values $\zeta(2, \dots, 2, 3, 2, \dots, 2)$,’ *Annals of Math.* 175 (2012), 977-1000.
- [11] J. Zhao, ‘Identity families of multiple harmonic sums and multiple zeta (star) families,’ *J. Math. Soc. Japan* 68 (2016), 1669-1694; preprint 1303.2227[NT].

(広瀬稔 (Minoru Hirose)) FACULTY OF MATHEMATICS, KYUSHU UNIVERSITY
E-mail address: m-hirose@math.kyushu-u.ac.jp